
I n s a n i t y (狂気の沙汰)

絵爾久万

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Insanity (狂気の沙汰)

【Nコード】

N7539B

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

狂っているのは私？それとも私を取り巻く世界？正気と狂気が狂喜乱舞するエニグマティック・ストーリー。【注】エログロあり

「杏奈・・・」

誰かが私の名を呼んだような気がした。

携帯のアラーム音と同時に眼が覚めた。

なんで朝は、こつも毎日慌ただしいのだろう。

30分早く起きればニュースを見ながら、ゆとりを持って朝食を摂ることができる。

トーストにベーコン・エッグ、ミモザ・サラダにグレープフルーツを添えて、コーヒーを飲み、デザートにヨーグルトを食べることもだつてできるだろう。

汚れた食器を洗って出れば、帰りだつて気持ちよく家に帰って来れることもできる。念入りに化粧をし、ゆとりを持って職場に入れば、きつと一日も楽しく優雅に過ぎていく事だろう。

30分早く起きる。携帯のアラームを30分早くセットすればいいだけ。簡単なことだ。しかし、そんな簡単なことができない。

ひとりの夜は誘惑が多すぎる。どんなに遅く帰って来たつて、どんなに早く帰つて来たつて同じこと。

音楽聴いたり、本を読んだり、連続テレビドラマを見たり。パソコンの電源を入れたら最後、時空迷路に迷い込み。気が付けば日付が替わっている。

結局朝はぎりぎりに起きて、トーストをコーヒーで流し込み、歯ブラシくわえながら、ニュースを見て、口をすすぐと同時に顔を洗い、着替えが済んだら鏡に向かい、化粧水塗ったら、美容液。

化粧下地の上に素早くファンデーションを塗り、頬紅、眉、シャドウを入れていく。そうやって熟練した手つきで、毎日毎日同じ作業を繰り返して行く。まるでくだらないゲームだ。無意味だ。しかし、これは武装だ。武装をしなければ危険だ。

・・・など、考えながらテレビを見ると

時刻表示は・・・7:47

あと10秒で口紅塗って、50秒でマスカラ塗って、30秒でコート着て、20秒でマフラー巻いて、30秒でiPodセットして、40秒で戸締りして、7時50分には家を出なければタイムアウトだ。

そんな訳で、第一ステージを上手くクリアしバスに乗った。私は釣り革につかまって溜息をついた。

そうだ、週末は達也が来るんだ。掃除しなきゃ。部屋の中がぐちゃぐちゃだ。だけど、年度末だから、ここんとこ毎日残業続き。

家政婦でも雇おうかな…。そんな身分じゃない。

しかし、駅に着くと次の難関が待ち構えていた。

ホームの上は人でごった返し、今にもホームから人が溢れ出さなばかりだった。

「お急ぎのところ、大変申し訳ございません。ただ今、吉祥寺駅構内で発生した人身事故により、電車は運転を見合わせております。詳しい情報が入り次第またご案内いたします。尚、小川駅から私鉄またバスで振り替え輸送も行っております。お急ぎの方はお乗換えください」

またか・・・。

人身事故って事は飛び込みか？最近頻発し過ぎだ。
今週の月曜日も人身事故があったばかり。たしか先週の水曜日も人身事故で遅刻した。

電車の中でいつ動くのか、じつと待つのは苦痛だ。だからと言って遠回りして、振り替えの電車に乗り替えれば、乗り換えた途端に反対側のホームでは、遅れていた電車が先にシュッパーツツ！！なんていう最悪の事態も起こりえる。

そんな時は、爆弾仕掛けて電車ごとぶっ飛ばしてやりたい気持ちになるが、聡明な私はそんな野蛮な事はしない。新宿駅西口右から3番目改札強行突破だ。

私は今日は、乗り換えずに待つほうを選択した。

しかし、いくら世知辛い世の中だからって、そんなに人は電車に飛び込むものだろうか。そういうニュースもあまり耳にしない。

第一こんなに頻繁に人身事故が起きているというのに、実際その現場を目撃したことは未だ嘗て一度もない。

本当に人身事故は起きているのだろうか。血肉滴る生々しい場面には、未だ嘗て出会ったことはない。

あやしいものだ。運転手が途中下車して、用を足しているのではないだろうか。こんなに頻繁に起こっているのだから疑わざるをえない。

何万人もの無実な乗客の足を乱して、振り替えだけでは済まないだろう。現金を返してください。それができないなら運転席に便器を付けるくらいの配慮はしてほしい。

結局、その日の作戦は裏目にでた。電車はそのまま2時間不通となり、私は車内で2時間待ち続けなければならなかった。

会社に着いたのは、お昼前だった。

「すみません。人身事故で電車が遅れてしまって」

私は佐藤課長の所へ挨拶に行つた。

「あれ？そうだった？いなかった？気が付かなかったなあ。無理しなくていいんだよ・・・」

課長は机の上に、昼食の弁当を広げながら言った。課長の意識はもう、机の上の弁当にしかなかった。

「いやあ、久々に今日はトンカツ弁当だ。あさがおのトンカツは旨いのご飯が若干少ないので、今日は牛丼弁当付きだ。もちろん野菜も食べなきゃいかんから、丹羽くんにもマカロニサラダも買ってきてもらつたよ」

「野菜というよりは、炭水化物や脂肪分が多いのでは・・・」

「ちよつと、君悪いが冷蔵庫の中からトンカツソース取ってきてくれないかい？おれ専用の大きいサイズの奴が入ってるから。ブルドックの。あ、名前書いてある。ついでに悪いが自販機でコーラも買ってきてもらえるかい？良かったら君にもジュースを一本奢ろう」

課長は私に、五百円硬貨を差し出した。

「お断りします。私は忙しいんです。今日は決算処理しなければなりませんから、失礼します」

私はそう言つて部長の前から立ち去つた。

「冷たい奴だなあ・・・。おうーい丹羽くん。ソース持ってきてくれーい！」

部長は弁当の蓋を開け、よだれを垂らしながら言った。

あれだから丹羽さんは、みんなの苦勞を背負つて生きていかなきゃならないんだ。もつと自分のために生きるべきなんだ。

と私は思った。

その日は残業し、家の前のバス亭にたどり着いたときは9時を過ぎていた。

自宅近くの紫陽花公園の中を通りかかったら、草叢から沢山の力エルが這い出して来た。

もう、春なんだ。

長い眠りから覚めた力エルたちは、緩慢な動作で移動していた。

朝のニュースで、アナウンサーが今日は啓蟄だと言っていた。

どの力エルも喉をクッククックと鳴らし、然もやりたそうな顔をして地面に這いつくばっている。

私は足元の貪欲な顔をした力エルを一匹踏み潰した。

グシャツ・・・といやな音がした。腹が潰れ、黒褐色の内臓がはみ出した。靴の裏側に付いた血と肉片を枯れ草で擦って落とした。

葉陰に隠れていた力エルが、上目遣いに私を睨んだ。そいつの顔も更に下品で貪欲だった。

その後、また4匹の力エルを踏み潰した。最後の一番大きな奴はしぶとくて、内臓はみ出しながらも死なずに草叢の中に逃げ込んで行った。

私は追いかけて行って、止めの一撃を喰らわした。

「あははははは・・・」

なんだか楽しくなって笑いがこみ上げて来た。

そんな訳で、その日家に帰り着いたのは、11時近かった。

玄関のドアの前に立つと、今朝の部屋の情景が一瞬にしてよみがえった。

うんざりだった。

週末は達也が来るんだ。

毎日少しずつでも片付けておかないと、ブタ小屋の中で達也とセックスする羽目に成り兼ねない。

いや、それはありえない。達也はきれい好きだから。神経質な位に、いや、病的なくらいに。

食器は使用前には必ず熱湯消毒、タオル類は滅菌漂白。食べこぼしだらけのカーペットは、ダニの住家だといってはがされた。

テレビや照明器具の上に積もった埃は、アレルギーの元だと拭いてまわる。トイレの便座カバーは糞尿の飛沫がかかるからと、はずされた。使用後は毎回エタノール消毒だ。

付き合って3ヶ月。肉体関係結ぶ前に、AIDS、梅毒、クラミジア、ウィルス性肝炎の検査を勧められ、検査結果の証明書を提示して初めてベッドインした。

はぁ……。私はため息を吐き、鍵を開けた。

玄関には、脱ぎ捨てられたブーツやパンプスが散らばっている。いつもなら気にも止めないが、客観的に見れば複数の人間が住んでいるみたいだ。

ブーツを脱ぎ捨て、玄関からキッチンを通過し、部屋に入った。なんだかいつもと様子が違った。

左側にベッド、右角にテレビ。前面の壁にはラック。本や雑誌、旅行先で買った土産物の置物などが並べられている。

部屋の中央には楕円形のテーブル。

私はテーブルの上を見て驚いた。まったく、きれいに片付いてい

るのだ。

朝、家を出るとき、この上にはマスカラやビューラー、その他化粧品の種類、トーストの食べカスや、飲みかけのコーヒーカップが無秩序に散乱していた。

食器類は見当たらず、化粧品の類はラックに全てしまい込んである。キッチンのシンクの中を見ると、溜まっていた3日分の食器類が全てきれいに洗われ、水きり棚の上に載せてあった。

「そ、そんな、ばかな。いったい誰が・・・」

今朝の記憶を辿ってみる。

秒読みで化粧を終え、全てやりっ放しで、出て来たはずだ。

私は部屋の中を隅から隅まで見回した。人の出入り出来る入口は玄関とベランダの窓だけ。玄関は鍵がしまっていた。

窓も内側から鍵がしまっている。入れるはずがない。

部屋の中は荒らされた形跡はない。何も取られていない。もっとも金めの物はなに一つない。

週末は達也がくる。気になっていたから私が片付けたのだろうか。まさか・・・全く記憶がない。

すると、突然、背中を何者かに触られた。

「うわっ!!!」

自然と身体が跳ね上がった。心臓が破裂しそうだった。

恐る恐る後ろを振り返った。

積み重ねられた通販の空箱が崩れてきたのだ。いつかこうなるだろうとは予測していた。

しかし、よりによってこんな非常時に。。。

私は無性に腹が立って崩れかけの空き箱の山を蹴飛ばした。

箱の山が雪崩れのように崩れてきた。

疲れていた。

もう何を考える気力もなかった。疲れているんだ。

きつと、思い過ごしに違いない。自分でやった事を忘れているんだ。達也が来るからって、急いでやったのだろう。そうに違いない。私はそのままシャワーを浴び、ベッドにもぐり込んだ。

次の日の朝は、出掛ける前にしっかりと状況確認した。

いつもと同じようにテーブルの上には化粧品の類や飲みかけのコーヒーカップ、トーストの食べカスが散乱している。おまけに今日は床にダンボール箱が散らばっている。

「よし！確認オツケー！」

私は声に出して言った。

家を出た。

バスに乗った。

今日こそ電車は遅れてないだろう。昨日の今日だ。

しかし、遅れていた。

私は国分寺から私鉄に乗り換え、馬場から地下鉄に乗り、御茶ノ水乗り換えで千代田線に乗り、都心を迂回し、松戸から常磐線に乗り、日暮里で山の手線に乗り換え、新宿駅西口右から3番目の改札を通り抜けた。

会社に着いた時、ちょうど午後の始業のベルが鳴った。

「なにも、そんなに無理して来なくてよかったのに」

チヨコレートでべっとりコーティングされたドーナツを頬張りながら、課長が言った。

机の上には弁当類の空箱が散乱していた。

「無理したわけじゃないんです」

私は言った。

「やはり、天井は井屋のが一番だよ。海老も大きいし、衣も厚い。」

なんてつたつてタレが濃厚で最高なんだよなあ。飯の下までしつかりタレが染みてやがる。たまんねえや！」

「はあ・・・」

課長が大きなゲップをしたので、私は急いで席に着いた。

その日の仕事は爪の手入れと、USBジャックにipodを繋いで充電するだけにした。充電を不正終了させたので、”このまま終了させるとシステムが破壊される恐れあり”のワーニングが表示された。

私は迷わずOKボタンをクリックした。ネットに繋がらなくなっていました。アップル社とマイクロソフト社がCPUの中で牽制であっているに違いない。明日システム部に連絡して直してもらおう。

しかし、ネットに繋がらないのでは仕事はできない。気分も悪かったのでその日は早退することにした。

「ゆっくり休みなさい。無理しなくていいんだよ。きちんと食事をしなきゃいけないよ。忘れがちだが、人間の身体は食べ物からできているんだ。基本を忘れちゃいけないよ。今の若者はなあ・・・」
課長がトリプル・ロッキー・ロードをベロベロ舐めながら言った。口の周りが茶色に染まっていた。私は話しの途中で失礼した。

早く帰ってゆっくり家で休もうと思ったのに、運の悪いことにまたまた、線路内不審者進入で山手線は前面ストップしていた。

これはゲームか？どこまで私を挑発するのか。しょうがない、また迂回だ。私は湘南新宿高崎ラインで熊谷迄行き、秩父鉄道に乗り換え寄居で降りた。そこから八高線に乗り換え、拝島から西武鉄道に乗り換えた。

長い旅だった。疲れ果てていた。

玄関のドアの前に立ち、鍵を開ける前に、今朝出て来た時の部屋の情景を思い出した。細部までよく記憶していた。

ドアを開けた。

いつもと様子が違っていた。

靴がない。玄関に散乱していた、ブーツやパンプスが見事に靴箱の中に片付いていた。

廊下に散らばっていた、靴下や雑誌の類も見あたらない。テーブルの上も見事に片付けられ、食器もすべて洗われ水切り棚の上に片付いている。食べこぼしのパンくずも落ちていない。

昨日と同じだ。しかも、今日は玄関迄。いったい誰が私の部屋を勝手に掃除しているのだ。鍵を開け、ご丁寧に戸締めして行く。

何のため？

ストーカー？この部屋の鍵は私しか持っていない。達也にだって渡した覚えはない。もちろん、それ以外の人間にも。

なんだか寒気がした。

今こうしている間も、誰かがどこかで私を見張っているかもしれない。突然私は言いようのない恐怖感に襲われた。身体が硬直し動けなくなった。

部屋中のあちこちで、ミシミシときしむ音がする。バリツと何かが剥がれるようなラップ音がする。目に見えない何者かがいる。確かにこの部屋のどこかにいる。

誰かが……どこからか……今も……この部屋の……どこかに……潜んでジツと……私を見つめている……

クローゼットの扉が少し開いていた。わずか2センチほどのすき

間から何者かがこちらをのぞいている。

「誰?…」

返事はない。

私はゆっくりとクローゼットに近付き、もう一度言った。

「そこに隠れているのは誰?」

返事の代わりに、中で何か動くような音がした。

私はドアを一気に開けた。

誰もいない。

黄色い花柄のワンピースが一枚、ハンガーから外れ、床に落ちていた。達也が買ってくれたフェラオのものだ。自分では絶対買わない高級品。

私はハンガーに吊るされた衣類を、次から次へと取り外し、クローゼットの中に頭を突っ込み、隅から隅まで中に隠れている何者かを探した。

しかし、そこには靴箱や衣装ケースが積み重ねられているだけだった。

私はクローゼットの側面や、奥の壁を押ししてみた。外れそうな箇所は見つからなかった。今度は椅子を持ち出して来て、その上に立ち天井の張り板を隈なく調べた。どこも天井板の外れそうな所はなかった。得体のしれない何者かは、ドアを開けた瞬間に私の足の間を擦り抜け、逃げて行ったに違いなかった。

いったいどこに……

クローゼットのドアは全開にしたまま、今度は部屋の中を見まわした。最初に、ベッドの下をのぞき込んだ。瞬間、何か影のようなものが、素早い動作で横に移動したように見えた。

しまった。

また逃げられてしまった。風呂場の方でガタンと物音がした。私は急いで風呂場に走り、ドアを開けた。

重ねた洗面器が崩れていた。白いモヤモヤしたものが、私の足元を擦り抜けて行ったような気がした。

今度は私をからかうかのように、ベランダの方でカサカサ物音がした。私は急いで窓を開け、ベランダを確認した。ゴミの袋が風でカサカサ揺れていた。私は袋の口をしっかりと結び直した。

右手首に異様な感触を覚えた。手首を見てゾツとした。背中から冷たい嫌な汗が流れた。

暗がりの中で目を凝らして見ると、右手首にカエルが1匹へばり付いていた。腕を振ってカエルを振り払おうと思ったが、ぴったりしがみついて離れない。

私は、右腕をベランダの柵の外側に出して、カエルを壁に叩きつけた。

グワッ！

カエルはしつこくへばり付いていたが、やがて力尽きて落ちて行った。後から右手首を見ると、そこに紫色の痣が出来ていた。

ピンポーン

突然インターフォンのベルが鳴った。時計を見るとすでに夜中の12時を回っていた。

3)

「こんな時間にいったい誰だろう・・・」

私は恐ろしくなって、ベッドにもぐり込んだ。

ピンポーン　　ピンポーン

インターフォンは何度も鳴らされた。

いやだ、いやだ、いやだ・・・私はベッドに潜り込み、毛布を被って震えた。

ピンポーン　　ピンポーン　　ピンポーン　　ピンポーン

しかし、あまり執拗に鳴りつづけたので、ついには根負けしベッドから抜け出なければならなかった。

足音を立てずに玄関まで行き、ドアの覗き穴から外を覗いた。見覚えのある男だった。下の階に住む、私の部屋の真下の住人だった。男とは引越してきた際に挨拶に行っただけ、話したことはない。30才半ばくらいだろうか、ガリガリにやせ細った神経質そうな男だった。

エレベーターでたまにすれ違うこともあったが、いつもマスクをして陰気な印象しかない。

こんな時間にいったいなんの用だっというのだろう。このままでは、いつまで鳴らされるかもわからないので、とりあえずインターフォンに出た。

「はい・・・」

「あ、夜分遅くにすいません。いつも昼間お留守みたいなんで・・・」

。さつき物音がしたので帰ってると思って、ほんと夜分に申し訳ないんですけど、町内会費をお願いしに来たんです」

男は言った。その口調に不信感を感じられなかったので、私は安易にドアを開けた。

「すみませんねえ。こんな夜遅くに・・・今年は当番なんです」

「ああ、じゃ今持ってきてます」

私は部屋の奥から財布を持ち出し、男の前に持っていった。

「おいくらでしたっけ？」

「半年分で3千円です」

「じゃ、お願いします」

「いつも、昼間はいらっしやらないですよね」

男はお金を受け取り、領収書に名前を書きながら言った。

「ええ・・・」

「ははは・・・普通そうですよね」

「ええ、まあ」

「僕の場合は逆だから・・・」

「えっ？」

「病院勤務ですから」

「先生？」

「いやあ、看護師です。と言いますか今は退職しちゃってますけどね」

「大変なお仕事ですよね」

「仕事は苦じゃなかったんです。医療ミスの責任かぶせられちゃって、辞職に追い込まれたんですよ」

「ええっ？ひどい。それって・・・泣き寝入りってこと？」

「まあ、最初はね。奴らは組織ぐるみでかかってきますから。でも、時間が経つに連れて、納得行かなくなつて・・・。今、訴訟を起こそうかと弁護士に相談しているところなんです」

「そ、そうなんですか？」

「うつ病の自殺未遂の患者を医療ミスで殺してしまったんだ・・・当時私は外科勤務でしたから、患者に医師の指示通りの投薬を施しただけだったのに、ぜんぶ僕のせいにされて・・・」

男はペンを領収書に立てて、顔を歪めた。

あまり深く関わらない方がよさそうだったので、私は言った。

「あ、あの・・・もう、遅いので失礼させてもらっていいですか？」

「あつ、すいません。じゃ、これ領収書。じゃ失礼します」

男はそう言つて、すんなりと帰って行った。

玄関のドアを閉め、鍵を掛け、ほっとひと息ついた。極度の疲労感に襲われた。もう何を考える気力もなかった。私はそのままベッドに倒れ込み、深い眠りに落ちた。

朝、目が覚めた。

部屋の中、床の上は、衣類や空き箱などが散乱して、手の施しようが、なかった。

頭がガンガンして目眩がした。身体が熱っぽい。昨夜の右腕の痣が赤く腫れ、水膨れになっていた。このせいに違いない。

私は会社に電話をし、具合が悪いので病院に寄つてくると伝えた。

「無理してこなくてもいいんだよ」

課長が電話口に出てきて、口をもごもごさせながら言った。

「仕事が間に合わないの、休むわけには行かないんです」

「じゃ、来る途中、中野のぼんちゃんて鯛焼きを3個買ってきてくれないかい？あすこのは、尻尾まであんこがたっぷり入って旨いんだよ。皮もパリパリしていていい。あつ、君も食べるなら好きなだけ買っておいで。並ぶかもしれないがよろしく頼むよ」

私は返事をせず電話を切った。

それから私は出かける準備をして、達也の所へ寄った。部屋の中は片付けて行かなかった。どうせ帰ってきたらきれいに片付いているのだ。

達也に、ここ数日間に起こった、ありえる筈がない様々なこと。カエルに張り付かれて腕が腫れたことなどを話した。

カエルを潰した事は話さなかった。

「ばい菌が入ったんだろう。消毒して抗生物質を出しておくよ」

達也は精神科医でもあり、私の恋人でもある。達也は話しを聞いても驚く様子もなく、カルテにスラスラ何かを書き込んでいる。

「ねえ、もっと驚いてよ。私の知らない間に私以外の誰かが家の中に侵入して、部屋中を掻き回しているのよ」

「君にはいつも驚かされているからね。もう、大抵の事では驚かないよ。部屋は片付いているんだし、物も盗られていないと言う事だし……」

「そんな……。黙って人の家に入ること自体が犯罪行為でしょ？」

「でも、鍵はしっかり閉めてあるんだろ？」

「だから、怖いのよ」

「ははは、霊の仕業だとも言うのかい？」

「カエルかも？」
「カエル？いきなりだなあ」

「うん。私が潰したカエルたち。そうだ！やつらの復讐に違いない。いやーん怖い。カエルの復讐よ」

私はうっかり口を滑らせてしまった。案の定、達也は驚いた顔で私を見た。

「潰した？復讐？カエルの？」

「うん、あの・・・」

「ゆっくりでいいから、全部話してごらん」

「あ、あの・・・裏の、紫陽花公園の草叢から、どんどん這い出してくるの。私の足元にいつぱい、うろろう纏わりついて気持ち悪いもんだから、潰しちゃったの。お腹潰れると赤い内臓がグシャツとび出してくるんだよ。最初は気持ち悪かったけど、何度かやっていく内に、潰したときのグツシャツっていうあの感触がたまらなくなつて。ふふふ・・・達也もやってみる？」

「ああ、今度行ったとき試してみるよ。しかし、そのカエルたちの復讐ということはありえない」

達也は更に、カルテに何か書き込みながら言った。

「じゃ、なんで11階の私のベランダにカエルがいたの？通常ならありえない。11階迄よじ昇って来たって言うの？それともひとりでエレベーターに乗って11階のボタンを押して昇って来たって言うの？」

「有り得ないとも言えないね」

「じゃ、この痣はなんなの？」

「だから、細菌感染。もしくは毒素によるアレルギー反応だよ。皮

膚から毒を分泌するカエルだっているからね。どこかで飼ってたカエルが、逃げ出してきたとも考えられる。気をつけないと・・・」

「じゃ、私の留守中に私の部屋に侵入し、片付けをしているのは誰なの？」

「うーん、それは何とも言えないが、あまり気にしない方がいいだろう」

「そ、そんなあ・・・。達也、冷静すぎる。自分に関係ないことはどうでもいいって言うの？」

「そう言うわけではないけれど・・・」

「あっ！あいつだ・・・」

「ん？何・・・」

「下の階に住んでる、マスクの男」

「マスクの男？」

「うん。たまにしか会わないんだけど、いつもマスクをしてる陰気な感じの男」

「何かされたのかい？」

「別に。ただ、昨日の夜中に町内会費集めにきたの」

「夜中に？」

「昼間いつもないからって。部屋の物音が聞こえたからって言ったけど、あの男・・・、ワザと様子を伺いに来たのかもしれない。犯人はあの男かも？第一町内会費の収集だなんて言うのもウソっぽい。毎年ポストに請求書が入っていたけど、今まで一度も払ったなかつたし・・・」

「うーん、それはなんとも言えないけど、調べればすぐにわかることだろう」

「私、恐くて仕方がないの。警察に届け出た方がいいのかなあ・・・」

「そ、それは、もうちょっと待った方がいいと思う。とにかく明日行くから、調べてあげるよ。抗生物質と軟膏出しとくから薬局寄ってって」

「うん。わかった……。じゃ、明日は絶対来てね」
私は達也に念を押し、診察室を出た。

薬局はひどく混んでいた。抗生物質と塗り薬といつもの薬をもらうと、もう6時を過ぎていた。

明日は決算締切日だ。今日中に仕上げなければならぬ仕事、山ほどあった。

会社に行くと、課長がひとり残っていた。自分の席で夕食を摂っていた。

「あれ？来たの？無理して来なくなってたてよかったのに」
課長は、大きな鰻を頬張って言った。
私はそれには答えず、机に付き課長の弁当を覗き込んだ。

「いやあ、旨いよこの鰻弁当は。笹家の鰻は肉厚で脂がたっぷりついているから旨いんだ。そのスーパード、駅弁祭りをやっていたんだ。閉店間際で、オール半額だったから、ほれ、だるま弁当も。それから鱒寿司と、豚カツ弁当、北海道海鮮丼も買ってきたよ。あ、よかつたら君これ食べないかい？」

課長は私に赤いだるま弁当を差し出した。

「結構です」

「なんだい、冷たい奴だなあ。あ、君、それから鯛焼きは買えたのかい？」

「行列が2キロほど続いていたのでやめました」

「そっかあ……。残念だな」

課長は肩を落として、本当に残念そうな顔をした。

「カロリーオーバーなんじゃないんですかあ？出来合いの揚げ物なんて古い脂たっぷり染み込んでますからね。身体に毒ですよ。こないだの検査でコレステロール値高かったから、自殺行為でしょ。それに脂ギトギトの酢豚にマカロニサラダまで買ってきて。そんなもんカロリーばかり高くて栄養価なしなんですよ。だからそんなに脂ぎってるんですよ。気持ちが悪い。まるでガマ蛙みたい……」

「ゲゲツ……」

123キロの巨漢が喉を詰まらせた。背中を丸めて、咳込み額から脂汗を垂らした。

グシャッ……

いやな音がした。

「あはははは……」

私は面白くなって、踏み潰した。

何匹も、何匹も、てらてらと脂ぎった茶色いまだら模様の皮膚を

した生き物が、草叢から次々と這い出してくる。
それでもかわいそうなので、はらわたを引きずり、逃げて行くカエルを追うような、残酷な事はもうしなかった。瀕死の状態で留めてやった。

草叢の中を見渡すと、無数のカエルが茶色い枯草の中で、のた打ち回っていた。

沈丁花の艶かしい薫りに誘われ、せつかく永い眠りから目覚め、交わり相手を探そうと、浮かれ気分で這い出てきたというのに。
ああ、なんて、かわいそうなカエルさんたち。

家に戻ると、予想通り部屋の中は、きれいに片付けられていた。
玄関もテーブルの上も、トイレもバスタブも、気になっていた排水溝に溜まった髪の毛も処分されていた。

明日は達也が来る。もう、何もする必要はない。

玄関から、血生臭い匂いが漂ってきた。見るとブーツの底が血だらけだった。鏡の前に立つと、着ていたコートの裾にも沢山の血が飛び散っていた。

私は風呂場でブーツを洗い、コートは洗濯機に放り込んだ。

ベッドの上に仰向けになり、言われるままに両膝を立てた。

衣類は何も身につけていない。達也は私の両膝の上に左右それぞれの手を載せると、ゆっくりと両側に開いた。

次に、閉じた弾力のある柔らかかな部分を、両手の指で押し広げた。普段、誰にも見せることのない秘密の内側が、達也の目の前で丸出しになった。

「いやらしい……、ヌルヌルしたものが、いっぱい出てくるよ。やらしいなあ……安奈」

達也はそう言って、私の秘部を間近でじつと眺めた。

「それじゃ、はじめるよ」

達也の手には、殺菌消毒用の脱脂綿を挟んだピンセットが握られていた。

いつもの儀式が始まった。

冷たい感触が粘膜に触れると、身体がブルツと震えた。ひだ状の層の上を脱脂綿がなめらかに滑っていく。

消毒が済むと、今度は軟らかくなま温かいものが、内側のひだを掻き分けていった。生き物のように。

「あ……」

私の脳髄は瞬間的に痺れ、恍惚とした気分になった。

「ひくひくしてる、やらしい……、やらしいなあ……」

達也は私の中心部で、舌をべろべろ這わせながら言った。

「気持ちいい……」

「そんなに腰動かして。やらしいなあ、杏奈」

Insanity (狂気の沙汰)

「ああん、イッちゃいそう」
「もう、びちよびちよだよ」
「もう、我慢できない・・・」
「欲しいの？」
「うん、欲しい」
「何が欲しいの？」
「達也のアレが欲しいの」
「アレって何？」
「おち・・・」
「はつきり言ってるらん」
「おち・・・。達也のおちんこ。欲しい」
「やあらしいなあ、杏奈。俺のどんなおちんこ欲しいの？」
「おつきくて・・・」
「おつきくて？」
「硬くて・・・」
「硬くて？」
「黒い・・・」
「黒い・・・」
「達也の・・・」
「俺の？」

Insanity (狂気の沙汰)

「おちん」

「ようし、いい子だ・・・」

「はあはあ・・・早く入れて」

「はあはあ・・・どこに?」

「あたしのアソコ」

「あたしのアソコじゃわかんない」

「あたしのおま・・・」

「何?」

「お、おま・・・ん・・・」

「ん?よく聞こえなかった。もう一回」

「あたしのおまんこ」

「ようし、よく出来た。ほら、杏奈のまんこもつぶっちゃぐちゃ。

ほら、ほら、ほら、こーんなに」

達也はクリを舌先でベロベロ舐めながら、今度は右手の指(2本)をその下の洞窟に進入させた。

「あーん。気持ちいい・・・最高、ほんとにもうイッちゃいそう。あはん、入れて、はあはあ・・・」

「はあはあ・・・、入れて欲しい時は?なんて言うの?」

「達也の・・・」

「俺の?」

「硬くて・・・」

「硬くて？」

「黒くて」

「黒くて？」

「大きなおまんこ、早くあたしのぐちよぐちよのおまんこに入れてえ！はあ、はあ・・・」

「もう一回」

「達也の硬くて黒くて大きな大きなおまんこ、あたしのグツチヨグチヨのおまんこにぶち込んでえー！はあはあ・・・早くぶち込んでよう・・・はあはあ・・・」

「はあはあ・・・よく出来ました。そんなに腰を振って、いやらしい・・・はあはあ・・・」

「はあはあ・・・早くう・・・」

「あせるなよ・・・はあはあ・・・」

達也は私をじらしたいのか、なかなか入れようとはしない。今度は私の左の乳房の上にスルスルと手を滑らせ、中心の突起物を摘んだ。親指と人差し指で乳首をくりくりと動かした。

「ああん、もう、我慢できない。早くう、早く入れてよう」

私はそう言って、大きく開いた自分の太腿の間に視線を移した。開かれた両脚の間に、舌をベロンと垂らした達也の顔が見える。両手は私の股間に当てられている。

・・・じゃ、今、私の乳房を揉んでいるのは・・・

誰？・・・

誰なの？・・・

顔を上げると、目の前に大きな塊が目に入った。黒褐色をして所々血管が蛇のように浮き立っている。目を凝らしてみると、勃起した巨大な男根だった。しっかりと右手で握り、しごいている。左手は私の乳房を揉みながら。

「だれ？？・・・」

巨大な男根が邪魔をして、顔はよく見えなかったが、位置をずらしてよく見ると、見覚えのあるマスクをした痩せぎすの男が私の頭の上に跨り、私を見下ろしていた。

「キャアーーーーーッ！！！！！！！！」

私は大声で叫び、達也にしがみついた。

「どうしたんだい」

達也は唇の周りに、粘液を滴らせながら驚いた顔をした。

「マスクの男、マスクの男がおチンチンしごいてた。黒くて大きいやつ」

私は振り向かず、後ろを指差して言った。

「えっ？大丈夫か？杏奈」

達也は私を抱きしめ、なだめるように言った。

「後ろ。私の後にマスクの男がいる。下の階の男。今いたの。私のすぐ目の前に」

「何言ってるんだい？この部屋には僕と君以外だれもいないよ」

「怖い・・・」

身体の震えがとまらない。

「大丈夫誰もいないから。ほら、見てごらん」

私は達也にしがみつきのながら、恐る恐る後ろを振り向いた。

しかし、そこには誰もいなかった。

「ほら、誰もいないだろう。安心しろよ」

達也はそう言つと、私を押し倒しすぐさま挿入しようとした。

「やめて。やめてようっ！」

私はもう、到底そんな気分にはなれなかった。

「やっぱり、俺はやめておくよ」

翌日、階下のマスクの男の家の前まで来て、達也は突然言った。

「なんでよ。急に・・・」

「見ず知らずの俺が行って、不信に思われたらまずい。逆に怨みを買われたら、今度は本当に君がここに住めなくなる。それでは済まなくなる場合もある。とりあえず今日は今まで払ってなかった町内会費の事だけを聞いてくるんだ。僕はそこの陰で様子を伺っているから」

「うん。じゃ、もしなんかあったら来てよね」

「わかった」

私は恐る恐る、マスクの男の家のチャイムを鳴らした。中で何か物音が聞こえたような気がしたが、何度押してもインターフォンには誰も出なかった。

結局その日、マスクの男に会えることはなかった。

「よし、これでオッケーだ！」

達也はテレビの上に置かれた、アロマポットの中に、盗撮用カメラをセットした。

カメラは達也が自作AVを作る為に持ってきたものだった。ベッドの上でのロール・プレイングといい、達也の趣味には私自身最近少し引いている。

「暫く僕の病院に入院するといいいよ」

達也が言った。

「入院？なんで？」

「杏奈は、疲れているんだよ。疲れているから変な妄想見たりするんだ」

「確かに疲れているけど、妄想なんかじゃない。私の事を心配する振りして、結局私の事信じてないのね」

達也は私の両腕を掴んだ。

「僕はただ杏奈の事が心配なだけだよ。誰よりも愛してるんだ」

「絶対にいや。入院はしないわ」

「そっか、わかったよ。じゃ、明日の夜にまたくる」

達也はそう言って帰って行った。

翌日は、いつものように電車が遅れていなかった。私は珍しく遅刻をしないで出社した。

会社に着くと、佐藤課長の机の上には花が飾ってあった。

「課長はどうしたんですか？」

私は同僚のよし子ちゃんに聞いてみた。するとよし子ちゃんは、突然、目玉を大きく見開いて、私の前から逃げて行った。

総務の丹羽さんにも聞いてみた。

いつも穏やかな丹羽さんが、ガタガタ震えだし逃げて行った。

周りの人たちも皆、遠巻きにして私を見ている。みんな恐ろしいものでも見るように。

おかしい……

明らかに、みんなの様子がおかしかった。いったい何が起こったのだろう。誰も、答えてくれない。まるで集団いじめだ。

「いったい、私が何をしたっていうのよーっ！！！！」

私は大声で叫び、課長の机の上を平手で叩いた。花瓶が大きく揺れ、床の上に落ちた。紅い花弁とガラスの破片が飛び散った。

みんなは聞こえない振りをしていた。私はひどい疎外感を感じた。何よりも怖いのは大衆の中の孤独だ。仕方ないので私は帰ることにした。帰り際にエレベーターホールのところまで警備員が私に言った。

「外には異星人がまぎれている。そいつらを殺らないと、お前が殺られるぞ。いざという時のためにこれをもっていけ」

警備員は、緑色をした透明のプラスチック製の小さな玩具のピストルを私に渡した。

狂ってる。みんな狂ってる。まともなのは私だけ……。

私は思った。

駅までの道をゆっくりと歩いた。

パチンコ屋からひとりの老人が出てきた。両手を前にぶらんとたらし、ひよこひよこ私の方へ向かって歩いてきた。頭が異様に長かった。私の目の前で停まった。

「すみません。法華クラブにはどう行ったらいいんでしょうか？」

老人は言った。

「法華クラブ？」

あの警備員の言っていたことは本当だったんだ。

私はポケットの中のピストルを取り出し、老人の頭に突きつけた。

「法華クラブはどこですか？」

老人は言った。

私は引き金を引いた。

プラスチック製のピストルの銃口から青い光が、筋になって老人の長い頭に入っていた。老人はその場に倒れたが、すぐに炭化し、消えた。路上に老人の跡型だけが残った。

運の良いことに、現場は誰にも見られていなかった。私はほっとしてまた歩き出した。私の前を足音をバタバタ響かせて少年が横切っていた。

しまった。追っ手がすぐにやってくるに違いない。

時間は無かった。私は急いで駅まで走り、人混みに紛れた。電車に乗れば、また行く手を阻まれるにちがいない。私は丁度目の前に停まった、路線バスに跳び乗った。

平日の昼間のバスの中はガランとしていた。私は座席に腰掛け、車窓の風景を眺めた。

無秩序に自己を強調しあう看板、肩を寄せ合うようにひしめき合う木造の古い家々、崩れかけたビル、二足歩行のありんこども。それらゴミ色をした風景が私の視界から逃げて行った。どんどん逃げて行った。

バスの窓には鉄格子が嵌められていた。気が付くと私の隣に座った男が私の手を握っていた。男は私の耳元に囁いた。

「今から、法華クラブに集結だ」

まずい……。

運良く男に握られていたのは左手だったので、私は右ポケットから拳銃を取り出し男の胸元に押し付けた。

「しまっておきなさい」

男はその拳銃を見て笑いながら言った。

馬鹿にしたような笑いだったので、私は無性に腹が立った。私は迷わず引き金を引いた。

男の胸元に液体が滲み出した。

「冷たいから、止めなさい」

男はそう言くと、力づくで私から拳銃を奪い取った。

ああ、もうだめだ!!!

私は逃げ場を失った。

「どうしたの？」

会社から帰り、自宅の玄関の前にたどり着くと、ドアの前に達也が立っていた。

「どうしたのって。君を待っていたんだよ。今日来るって約束しただろ？」

「ああ、そうだったね。なんだか色々な事があって疲れちゃって・・・」

達也は突然背後から、いきなり私のコートの両ポケットに両腕を突っ込み、まさぐりはじめた。

「あはん、くすぐりたい。達也・・・やめて。こんなところで。昨日最後までしなかったから、欲求不満になっちゃったんだ。エッチ！」

すると達也は、私のポケットから鍵を取り出し、目の前でブラブラ揺らして見せた。

「バーカ」

そう言って、すぐさま鍵を開け私より先に部屋の中に入った。

達也が小型カメラをパソコンに繋ぎ、画像処理をしている間、私は食事の準備に取り掛かった。

食事の支度ができたことを告げに行くと、達也は真剣にパソコンの画面に見入っていた。

達也のしているものが、私にはひどく恐ろしい物のような気がした。

「食事の準備ができたけど・・・」

達也は何も返事をせず、ただ画面を真剣に見つづけていた。

「何か変なものが映っていたの？」

私が問いかけると、達也は黙ったまま私の方を振り向いた。

「何が映っていたの？」

恐る恐るパソコンに近づき覗き込むと、画面は既に停止状態になっていた。達也は椅子から立ち上がり、私に座れと合図した。

私は黙ったまま椅子に腰掛け、目の前のパソコンの画面を見つめた。メディアプレーヤーの待ち画面が表示されていた。

「再生ボタンをクリックしてごらん」

達也が言った。

言われた通り、マウスの左ボタンをクリックした。

正面にベッド、手前にはリビング・テーブル、右側に飾り棚、画面には見慣れた自分の部屋が映った。左手のキッチン画面に入りにきれずに切れている。

何も動かない変化のない映像が暫く流れた。早送りをして行く。

「何これ？」

画面の前を人影が通り抜けた。停止ボタンをクリックし、また少し戻ってみる。

カメラの位置が低いため、首から上が映っていない。画質の状態も最悪だった。グレーのスウェット・スーツらしきものを着ている。顔は見えないが長い髪が肩にかかっている。

人影はカメラの前を通り抜け、キッチン側へ消えていく。何度か往復した。キッチンの方から水の流れる音や、食器のぶつかり合う音などが聞こえてきた。また、動きのない映像が暫く続いた。

女が戻ってきた。今度は画面にかなり近づいた。ワンピースに着替えたようだ。髪が肩にかかっている。見覚えのある、黄色い花柄のワンピース。

リビング・テーブルの上にノート型パソコンを置き、女は足を投げ出し、その前に座り込んだ。低い姿勢になった女の顔が画面に映った。

眼を凝らしてよく見る。

鈍器で殴られたような衝撃が走った。

それは紛れもない、私自身の顔だった。

「何これ？何よこれえ！！」

信じられなかった。

達也は、リビングテーブルの上で、頭を抱え黙りこくっている。

パソコンの前に座り込んだ画像の中の私は、何やら真剣な顔つきでキーボードを打ち始めた。

画面は見えないが、様々な機械音が聞こえた。テンポの速い音楽、信号音、警告音、銃撃音、爆破音……。

「ゲーム？……」

インターフォンが鳴った。

画面の中の私は立ち上がり、カメラの前から姿を消した。

玄関のドアが閉じられる音がした。それからすぐに私はまたキッチンの中から部屋の中に現れた。

私はベッドの方へと歩いて行く。そして、私の背後に男がついてくる。私がベッドの前で立ち止まり、後ろを振り返った瞬間、男はいきなり私をベッドの上に押し倒した。

私の身体はベッドの上でバウンドした。男は私の上に覆い被さっ

た。マスクをした男の顔が画面にあらわれた。

下の階の住人だ。男は私のパンティーを力づくで脱がし、荒っぽい動作でワンピースの裾をめくった。

次に自分のマスクを外すと。めくったワンピースの裾の中に顔を突っ込んだ。

私の鼓動は大きく波打った。しかし、その直後の映像を見て、私の身体は凍りついた。

なぜなら、画面の中の私はマスクの男の前で両足を大きく広げ、嬉しそうに、高い声を出して笑っていたからだ。

その後、男と私は来ているものを全部脱ぎ、男は私の身体の上に重なった。

「いったいどうなってるの？ いったいどうなってるのよお！！」

頭が狂いそうだった。

私の記憶の及ばない所で、自分自身が男と全裸で抱き合い、喘ぎ声を出している。目の前に突きつけられた悍ましい姿が、自分自身のものだと信じることはできなかったが、実際映像の中にいるのはまぎれもない自分自身の姿なのだ。私はその状況をまったく理解できなかった。

目頭が熱くなり、涙が溢れた。

達也が後ろに立ち、私の両肩に手を掛けた。

「ねえ、だれ？ 誰なのこれ？ あたしじゃない。あたしじゃないでしょ？ ねえ。達也ったらあ……」

私は達也の腕にしがみ付き、泣きながら訴えた。

「香奈だよ」

達也は冷静な口調で言った。

「カナ・・・？誰それ・・・」

「君の中のもうひとりの君・・・」

「私の中の。もうひとりの私？・・・」

「そう、もうひとりの君。名前は香奈。ああ、だけど、君とあいつがこんな事までしていたなんて。ぼくも今、この画像を見て驚いているところだよ」

「私じゃない！」

「ぼくだって信じたくないよ。君がぼく以外の男とこんな事をしていたなんて！」

今度は、達也が頭を抱え込んだ。

「嘘でしょ？何かの間違いでしょ？」

「嘘じゃない。君は、仕事なんかしてないし、会社になんか行っていない。こうして毎日朝から晩までゲームしてるんだ」

「何を言ってるの？」

私は達也の言葉の意味が、理解できなかつた。

「いや、正確にはゲームをしたり、男を連れ込んでセックスしたりしているのは君ではなく君自身の中のもうひとりの君。君から解離した虚像の香奈という人物なんだけどね」

「わからない」

頭が締め付けられた。

「仕方がないよ。君が香奈として行動したことを、君はほとんど記憶していないからね。しかし、ぼくの言っている事はすべて事実だ。ぼくは君の選任精神鑑定医のひとりとして指定され、君の精神鑑定をした。そして君は法的な責任から免れることができた。何故なら君は重度の精神分裂病と解離性同一性障害と判断された」

「私がいつたい何をしたっていうの？達也の言っていることがわからない？私は毎日決まった時間に起きて仕度をして、電車に乗り会

社に行ってるわ」

「ゲームだよ」

「ゲーム？」

「ああ、ゲーム。カエル叩きも、人身事故も、異星人捜しも、全てゲームなんだよ」

「そんなこと、どうしたら信じられるっていうの？」

達也は私の頭を両側から押さえ、画面に向かわせた。

「実際この映像を見れば判るだろ。会社に出勤している筈の君は昼日中に自宅でゲームをして、失業中の男と寝ているんだ。この花柄のワンピース見覚えがあるだろ。僕が君に買ってやったフェラオのワンピースだよ」

涙が溢れてきた。頭の中が錯乱していた。

「部屋の中が片付いていたのも香奈・・・いや、実際は杏奈、君が自身がやっていることなんだよ」

「いやだーっ！！！」

「症状は快方に向かっていたから、週に一度の面会で自宅での自立生活を許可したのだが、状況はどうやらまた悪化してしまったようだ。実際ぼくと君とは医師と患者の関係を越えてしまった。予定外の事だったがこれは仕方ない。僕は君を心から愛している。医者として、また君の恋人として君を守りたい」

「どうしたらいいの・・・」

「入院した方がいいだろう。君のためにも」

「入院？」

「僕が主治医だから、僕がいつも君の側に付いてあげられる。その方が安心だよ」

「いや」

「症状がよくなればまた通院に戻れるんだ。このままでは、君はまた何をするかわからない」

「何をするっていうの?」

達也は窓際までゆっくりと歩いて行った。カーテンを少しだけ開けるとその隙間から外を眺めた。

黙って外を見続ける達也に私は言った。

「ねえ、何をするっていうのよう!」

達也はこちらを振り向いて言った。

「人殺しだよ」

「人を殺し?あたしが?・・・」

まったく達也は何を言っているのだろう。私はそう思った。いつものように、ふざけて私をからかっているに違いない。

こんな映像だって達也の造り物に違いない。そういう点では達也はマニアックなところがあるから、造ろうと思えば造れないことはない。

だいいち、なんで私が人殺しをしなければならないのだろう。殺したいほど人のことを憎んだ記憶はない。

記憶・・・

過去の記憶・・・

毎朝決まった時間に起きて、準備をして、バスに乗り、それから電車に乗って会社に行く。会社には佐藤課長や、よしこちゃん、丹羽さんに・・・

ああ・・・それ以外に私の記憶していることは・・・
頭の中が真っ白になった。

「君は同じ職場の上司を殺した。仕事中に花瓶を頭から振り下ろして。上司が醜く太っているというだけの理由でね」

「嘘・・・」

「そう。そして君が上司を殺害した瞬間に君の人格は解離し、香奈が誕生したという訳だ。君は君の中の悪の部分を香奈に支配させた。君は君の中から悪の部分を支配する香奈を追い出し、君の記憶の中

の悪の全てを消去した。時々君の意識下で香奈の記憶が形状を変えて現れてくるが」

「わからない。達也の言っていることがまったく判らない」

「それも、当然だろう。理解できる筈はないんだ。それも意識下で君がバリアーを作っているからね」

「そんな……。怖い。私はいったいどうしたらいいの？」

寒気がした。背中がぞくぞくして身体が震えだした。

「だから僕と一緒に病院へ行こう。車を下の駐車場に停めてある。今から一緒に行こう」

達也は強い力で、私をしっかりと抱きしめた。

「ずっと一緒に居てくれるの？」

「ああ、もちろんだよ。愛してるよ、杏奈」

達也は私の眼を見つめて言った。

1階のエレベーター・ホールに出ると、サイレンの音がけたたましく鳴り響いていた。救急車とパトカーがマンションの玄関前で停止した。

「なに？私を迎えに来たの？」

私は怯えて達也にしがみついた。

「違うよ。車は地下の駐車場に停めてある」

タンカーを持った救急隊員や警察官が、私たちの目の前を通り過ぎ、2台のエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターの階数表示は両方とも10階で停止した。私の住むすぐ下の階だ。

エレベーターの前で立ち止まっていると、達也が言った。

「さあ、行こう」

そして私の腕を強く引いた。

「ちよつと、待って。いったい何があったんだろう……」

「急病人でも出たんだろう」

「それにしたつて変じゃない？パトカーまで来てるんだから」

「ぼくたちには関係ないよ。さあ、急ごう」

達也は掴んだ腕を強く引つ張り、出口の方へ誘導した。

「いたいよ。やめて！私見てくる」

私は達也の腕を振り払い、エレベーターのボタンを押した。

「君の精神状態にはよくないよ」

「大丈夫よ。あたしひとりで見えてくるから、達也、車の中で待ってて」

達也は両手を広げ、観念した仕草をした。

「仕方ない。一緒に行くよ」

私たちはまたエレベーターに乗り10階まで上がった。

エレベーターの扉が開くと、すでに住人の人だかりができていた。私たちはその中に混じり、ドアの開けられた部屋を眺めた。

マスクの男の部屋だった。

中から騒がしい気配が伝わってくる。

暫くすると部屋の中から救急隊員がひとり出てきて、大声で叫んだ。

「はい、どいてください。今からタンカーが出ますから搬送の邪魔になります」

それでも住人たちは部屋に戻る様子もなく、廊下の端によけて興味深そうに様子を伺っている。

中から、タンカーが運び出された。白いシートが被せてあるので様子は見えないが、シートの下から衣類の端が少しはみ出している。縞模様のシャツは真っ赤に染まっていた。

「ナオトーツ！死なないでえ、死なないでよう・・・」

警官に支えられた60代前後の女が、タンカーの脇で泣き崩れている。

私は達也と顔を見合わせた。

身体がガクガク震えた。

「行こう・・・」

達也が私の手を握り締めて言った。

「いやだ、いやだ。やっぱり病院はいやだ」

達也に急かされて車に乗り込んだ途端、私は言いようのない恐怖感に襲われた。いったい何がどうなっているのか。考えれば考えるほど頭が混乱してくる。頭に輪を嵌められ、締め付けられるような鈍痛を感じた。

「大丈夫だよ。君は何も心配することはない。ぼくが付いているからね」

達也は冷静な口調で言った。

「それでも、いやなの。私帰る。帰りたい」

「何をいうんだ。大丈夫って言っただろ」

ドアを開けて外に出ようとしたが、自動ロックが掛けられた。

「いやだ。開けて、お願い開けてよ!」

私は内側からドアをドンドン叩いた

「いったい、どうしたっていうんだよ?」

達也が強い力で私の腕を掴んだ。

「いや。離して!」

突然、右腕に激しい痛みを感じた。見ると注射針が腕に刺さっていた。

「な、何するの?」

「君が言うこと聞かないから・・・」

意識がまどろんだ。

頭の中が真っ白になった。

突然、真っ赤な血飛沫が目の前に広がった。太った男の頭から血がだらだらと流れたしている。

私の両手にはガラスの花瓶が握られている。花瓶の先は割れ、割れたガラスの破片が血だらけの頭に刺さっている。

男の身体はガクンと揺れ、ゆっくりと斜めに傾き、そのまま床に倒れ込んだ。像のような巨体が床の上でバウンドした。

血液が床の上で波紋のように広がった。

よし子ちゃん、目玉を大きく見開いて、私の前から逃げて行った。いつも穏やかな丹羽さんが、ガタガタ震えだし逃げて行った。周りの人たちも皆、遠巻きにして私を見ている。みんな恐ろしいものでも見るように。

アハハハハハハ・・・

なんて、すつきりした清々しい気分なんだろう。私は皆の見ている前で大声で笑ってやった。

ベチャベチャベチャベチャ喰ってばかりいる、この脂ぎった醜い化け物を私は遂にやつつける事が出来たんだから。

こいつの頭の中には、喰うこととやることしかないんだ。貪欲で下卑た眼でいつも私を見ていた。そんなに驚いた顔して、本当は皆だって嬉しいに違いない。

ナオト・・・ナオトが死んだ

ナオトを殺したのは・・・

「ナオトを殺つたのお前だろ。わかってんだよ。ナオト、お前と同じ病院で働いてたんだ。あたし全部知ってるよ。お前の犯した罪、ナオトにおつ被せて、それで、ヤバそうになつたから証拠隠滅のため殺しちゃったんだろ？今度は犯人あたしに仕立てて・・・」
頭の中に重たい雲がかかってくる。視界が狭まってくる。

「何言ってるんだよ、杏奈。君はおかしな事をいうよ。それもすべて君の妄想さ」

「人殺し・・・」

「杏奈・・・愛してるよ。ぼくは君から離れない」
達也は唇の端に笑みを浮かべて言った。

Insanity (狂気の沙汰)

「杏奈？私の名前は香奈だよ・・・」

重たく垂れ込めた雲がだんだんと低くなってくる。雲の塊はやがて私を包み込み、意識が遠のいていった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7539b/>

Insanity (狂気の沙汰)

2009年7月3日19時02分発行